No.２６７７

たおやかな山容の東京都の最高峰
雲　取　山

実施日　2014年6月28日(土)～29日(日)
天　候　28日･雨　29日･曇り／晴れ
リーダー　渋谷　京子
Ｓ　Ｌ　島本　陳重
参加者　島本陳重、山崎富美恵、白石恵美子、小松勲、安田三恵子、小村井好枝、石附智江、渋谷賢寿、渋谷京子、柴田正喜、遠井謙策、中村友子、伊藤久雄、山口美知子、長濱隆行、長濱あゆみ、小名秀鋭、石附智子、佐藤政司、石附恵理子、浜田優美子
計２１名
費　用　電車1,240円、バス1,700円
宿泊費8,200円　合計11,140円
タイム　6/28奥多摩駅(🚌9:30~10:25)丹波BS(10:40)衣服調整(11:00~11:05)休(11:35~40)1180m附近(12:30~12:45昼食)サオラ峠(13:23~13:30)林道分岐手前(14:20~25)三条の湯(13:35)　泊
6/29三条の湯(6:20)衣服調整(6:38~43)休(7:13~18)休(8:10~15)三条ダルミ(9:05~20)雲取山(昼食10:00~55)奥多摩小屋(11:30～11:35)休(12:30～40)休(13:30～45)鴨沢バス停(15:10)

6/28　数日前から大気の状態が不安定で各地で雷雨に見舞われ山行が危ぶまれたが、翌日は回復と見込み決行した。
テント泊組を含め２１名の大パーティーとなった。雲取山の人気度が伺える。

朝から生憎の雨、カッパを着ての

スタートとなった。丹波バス停から青梅街道を進むとすぐに右にサオラ峠への道標が有り山畑の中を登って行く。鹿の防護柵をくぐり樹林帯の急斜面をジグザグに高度を上げる。途中、二度の休憩と昼食を挟みサオラ(竿裏)峠に辿り着いた。

標高800m近く稼いだ事になり、雨と汗で全身ぐっしょり！フタリシズカの群生に癒やされる。左に飛龍山へ通じる尾根が延び路傍に石祠がある。峠から三条の湯まではほぼ下りで、沿道には落葉広葉樹が広がり緩やかな長尾根を越えて行く。

林道分岐手前で水かさの増した沢を慎重に渡り、権現谷からカンバ谷といくつかのアップダウンを繰り返す。やがて薪で炊いている香りが鼻腔をくすぐる。三条の湯の赤い屋根が目に飛び込んできた。受付を済ませ、30畳以上あるかと思われる小屋一棟は貸し切り状態。縁側には大テーブル、真下には雨に濡れた渓谷が広がる。雨と汗に濡れた衣類を薪ストーブで乾かす。早速お風呂で汗を流しサッパリ！美味しい夕食を頂き、９時頃就寝。

6/29　ＡＭ5:30朝食、小屋の方から三条沢の橋が記録的な雪で崩落し、徒渉時に靴を脱いで渡るようかもと助言あり。
リーダー各氏に相談しS氏二人に様子を見に行って貰い、石を置いて何とか渡れるようにして来てくれた。お陰様で水か

さの増した沢を無事渡り、左に回り込むようにして青岩鍾乳洞（通行止め）への道を分け水無尾根の登りに取り付く。所どころ石炭岩の露岩の混じった道でハンゲショウ、ブナやミズナラの広葉樹の中を徐々に高度を上げて行く。しっかりした木橋が6~7箇所かかっている。

昨日とはうって変わって時折雲の切れ間から薄日の射す山日和となった。うぐいすの鳴き声が静寂の森にアクセントを付ける。

樹林を纏う霧のベールも幻想的だ。カラマツ林を過ぎると道は平坦になり三条ダルミに出る。

左は飛龍山へ、雲取へは東の尾根道を登る。展望は素晴らしく富士の頂が雲間から望めた。エネルギーを補給し最後の急坂に備える。カラマツの目立つジグザグ道に息を弾ませながら登りつめると避難小屋とトイレの有る雲取山山頂の一角に飛び出す。山荘方面へ進むと一等三角点のある本物の山頂に到着。

富士山を初め丹沢、奥多摩、奥秩父などの山々が見渡せる訳だが雲がかかり残念！　集合写真に収まりランチタイムとする。眼下にはこれから下る防火帯の尾根がはっきりと見てとれる。小屋の辺りで可愛いシカの親子に遭遇！

雲取に別れを告げ、いよいよ１５００ｍの下りにかかる。盛夏にはお花畑が広がる急斜面を下って行く。両側にカラマツ林が続き晩秋には黄金色に輝いて、さぞかし綺麗な事だろう。

富田新道を左に分け奥多摩小屋で小休止。ヘリポートを過ぎ七ッ石山の分岐に差し掛かる。右に巻き道を進み明るい広葉樹の中を暫く下ると、左へ七ッ石小屋への道を分け登り尾根に合流する。

ここから緩い下り坂が延々と続く。しかも昨日の雨でぬかるんでいて歩きにくい。二度の休憩を挟み、堂所～小袖～所畑と樹林帯をぐんぐん下って行くと林道に突き当たる。林道を横切り直進して山道に入ると２０分程で漸く鴨沢のバス停に到着した。

今回、リーダーの方々、会員の皆様のご協力により二日間の厳しいロングコースを全員無事に完歩出来た事、大変嬉しく思います。

二日目の後半、休憩タイムの見誤りから早足を強いてしまって申し訳なく思っています。雨の中参加されたメンバーの方々、有り難うございました。

懲りずに又、ご一緒しましょう！！

（記・渋谷　京子）

（写真提供／伊藤　久雄）